

日本屈指の埴輪職人 presents

「Made In

GUNMA」

の埴輪たち



群馬大学共同教育学部附属中学校

1年4組 佐藤 陽

1:調査の動機と目的

1-1.調査の動機

私は「東国文化自由研究」の募集の要綱を見た時に、群馬県は「質・量ともに日本一の古墳大国」であることを知った。東京都でも大阪府でもなく、群馬県が日本一になることは、さほどない。私は県の魅力度ランキングなどから、群馬県がいつも低迷する状況に、寂しさと虚しさを感じていた。だが、今回は違う。群馬県が全国1位である。

圧倒的な美的センスと神秘的な要素を兼ね備えた埴輪たち。悠久の太古のロマンを感じさせる古墳群。それらの多くが群馬県から出土したことは、単に学術的な価値だけではなく、令和に生きる我々子孫に、何かを語り継ぎ、何かを教えようとしている。

人類が経験したことのない未知のコロナウイルスとの戦い。ロシアによるウクライナ侵略戦争。緊迫する台湾情勢。閉塞感の漂う世界情勢の中で、なぜ私たちは過去から学ぼうとしないのだろうか。祭司的、儀礼的な意味合いを持つ埴輪や古墳から、きっと現代に生きる我々に対するヒントが隠されているはずである。

しかしながら、私は、群馬県に住んでいるにもかかわらず、古墳や埴輪の実物をしっかりと観察することがなかった。私は、群馬県で生活しているにも関わらず、とても恥ずかしいと感じた。そして、それらを調査する中で、古墳大国群馬の「特徴ある埴輪」が、どのような役割や機能を持っていたのか、非常に興味が沸いた。太古の壮大なロマンに浸りながら、「Made In GUNMA」の埴輪たちに絞り、歴史的意義やそこから現代社会に応用できる英知を考察して見ることとした。

魅力度ランキング44位にも関わらず、日本一の埴輪県？埴輪には魅力がないの？



資料1 2021年都道府県魅力度ランキング 資料2 群馬県立歴史博物館 パンフレット

1-2.調査の目的

国宝や重要文化財に指定されている埴輪は59件あるが、その内の約4割である22件が群馬県から出土している。芸術的、学術的価値の高い埴輪が、私達の群馬県から数多く出土している。その多くは、特徴的な表情やしぐさをした人物であり、装飾された馬、戦に使用したと思われる太刀などである。全てが魅力的に思われる。

なかでも、私は、我々に何かを語りかけているかのような「人物の埴輪」に魅了された。そこで、動作やしぐさに興味を惹かれた①正座(跪座)した埴輪、②椅子に座る埴輪の2つに絞り、その役割と意義、そこから学んだ事などを検証して見ることにした。

【検証ポイント】

- (1) 正座した埴輪・正座とは何を意味するのか。どのようなときに正座したのか。など
 - (2) 椅子に座る埴輪・椅子には誰でも座れたのか。どのようなときに座ったのか。など
- * 正座する人と椅子に座る人。その埴輪の口元は明らかに違い、何かを訴えている。

2:調査方法と埴輪に対する調査内容

2-1.調査方法

以下の順序で現地調査を実施し、資料等の分析を行った。

(1) 綿貫観音山古墳での現地調査

綿貫観音山古墳を実際に訪問し、古墳の大きさや形だけでなく、埋蔵品が出土した場所や石室の観察等を行った。古墳を実際に調査する事で、頂上からの眺めや当時の景色を想像し、当時と変わらないであろう山や川との位置関係を確認した。

(残念ながら、コロナウイルス感染症の影響で、訪問日に石室には入れなかった。)

(2) 群馬県歴史博物館での見学

博物館での展示を見学した。また、売店にて書籍等を購入し、参考資料とした。

(3) かみつけの里博物館にて展示物を見学と保渡田八幡塚古墳での現地調査

古墳の形状や高さ、敷地の広さなどを検証した。博物館では、埴輪にスポットライトをあてて、綿貫観音山古墳から出土したものとの違いを調査した。

(3) インターネットや書籍、博物館のパンフレット等を通じて、資料分析や情報収集を行った。なるべく埴輪に関する多くの情報を検証し、ポイントを絞って考察した。



写真1 綿貫観音山古墳にて

現地調査であまりの大きさに驚いた。実際に目で見ることの重要性を学んだ。炎天下であったが、実物に触れることで、古代人の気持ちが少し分かった気がした。

2-2. 埴輪に関する調査内容

(1) 群馬県から出土した埴輪の分類

群馬県から出土した埴輪は約 200 種類ある。一口に埴輪といっても、これほどまでに種類があるとは想像もしなかった。しかし、更に驚くべきは、それらが、大まかに5つのグループに分類されることである。僅か5種類に分類され、その特徴もきちんと定義されている事にとっても感心した。

① 人物埴輪、② 動物埴輪、③ 家形埴輪、④ 器財埴輪、⑤ 円筒埴輪

では、そもそも埴輪とは何なのか？

⇒埴輪とは「古墳に並べるために作られた焼き物」であり、約1500年前の古墳時代に作られた。時代の変化と共に埴輪の役割も変化し、簡略的な壺のような埴輪から、生前の世界観を表現し、死後の御霊を守り崇拝する人物埴輪まで幅広く作られた。

① 人物埴輪について

その名の通り人物を表している埴輪であり、様々な種類の埴輪がある。王様、巫女、力士、農夫、古墳の外側で古墳を守る人などである。その中でも、私が特に気になった埴輪は、「正座(跪座)する」「椅子に座る」などの表情やしぐさを持ち、今にも動き出しそうな埴輪である。他の埴輪と違い、独自の雰囲気醸し出し、私に何かを語りかけながら動作しているかのように感じた。

はるか昔に作られた埴輪が、なぜこれほどまでに人々を引き付けるのだろうか。そのしぐさや役割を紐解きながら、検証する事はとても面白いなと感じた。

② 動物埴輪について

動物を表現している埴輪である。古墳の中に眠る権力者に関係する動物が、表現されている。その中でも群馬県で90%以上を占めているのが「馬形埴輪」である。この馬は、財産や富を現し、この当時、馬が多く群馬県にいたことがわかる。

そのため、豪華な装飾が施された馬形埴輪の出土から、当時の群馬県には、他の地域と違い、財力や権力を持った富裕層や支配層が多く集まっていたことが分かる。ひょっとしたら、この当時は政治の中心がヤマト政権(西日本)であっても、文化・芸術の中心は群馬県(東日本)にあったのかもしれない。なお、群馬県で出土した馬形埴輪の種類は、約36種類にも及ぶ。

③ 家形埴輪について

古墳の頂上に飾られていることが多い。埋葬者の生前か、死後の屋敷を表す住居倉庫、納屋などがある。そしてこれらは、死者の魂が宿る家を現している。この家形埴輪は屋根が特徴的で、尖っているものもあれば、尖っていないもの(緩やかな屋根)もある。この違いにより、権力者の生前の職位(地位)がある程度わかる。この時代の職位は、死後もなお引き継がれ、それが御霊となり崇拜されていたのかもしれない。

④ 器財埴輪について

器財埴輪は、王者の力を示すものであり、神聖な古墳を守る盾や甲冑などの武器、帽子や日傘などがある。細かい装飾が施されており、当時の埴輪を作成した職人の技術力の高さだけでなく、現代のファッションとしての要素も想像させる埴輪である。

⑤ 円筒埴輪について

弥生時代後期から、お供え物を入れる壺として、使われていた。5分類の埴輪の中で一番歴史が古く、一番出土が多い埴輪である。円筒埴輪に穴が空いている理由は、魔除けのためだと言われている。穴は決して丸だけでなく、三角や四角もある。中には、円筒埴輪に人面が付いた埴輪も出土している。



なぜ頭を下げる？謝罪？
どのような時に正座する？神事？
何を語っている？無言？…



写真2 正座(跪座)した埴輪

上記より、群馬県には当時の富裕層の証である馬が多く飼育・放牧され、出土した豪華絢爛な埴輪の様子から、ヤマト政権との深い結びつきを伺わせる。東日本随一の古墳大国である群馬県。古墳の数に比例するかのよう、上記①～⑤に分類された埴輪が、全て埋葬される「全部のせ」パターンも多いようだ。

群馬県には、多くの優秀な埴輪職人の集団が暮らし、豊かで安定した政権下で、技術を磨き、文化的芸術的な要素が同時に育まれたのではないと思われる。

(2) 調査対象の埴輪の分析と考察

①正座(跪座)した埴輪 参考:「跪座の男子」(国指定重要文化財)

ア:特徴

正座(跪座)はどのような時にするのだろうか。精神を統一し、主君に忠義を示すとき? 宗教的な儀礼のとき? 謝罪するとき?

⇒埴輪を観察する限り、両手を揃えて地面につき、顔をやや上げ、前方を見つめている。注目すべきは、埴輪の後部を確認したときのみ発見できる両足のしぐさである。両足の爪を立てて、かかとの内側を付けている点である。これは、「跪座」と呼ばれる姿勢で、次の動作を素早く行うことに適している。また、口元は横一文字に閉じている。腰に刀を携えていることやグローブのような武具を付けていることから、おそらく男性の軍人であると推測できる。ピンと張りつめた空気感から、戦(いくさ)やヤマト政権の情勢報告をしているのかもしれない。

イ:役割

主君への忠義や宗教的儀礼に関しては、おそらく正座(跪座)をしたと思われる。特に主君への服従や尊敬の念を示すために、目線を低くし、目を合わせないよ
うにすることで、反抗の念がないことを伝えていたのではないかと思われる。すぐに次の動作に移れるように前傾姿勢を保ち、準備をしている。こうした、日本独自の正座文化は、現代にも受け継がれ、上座や下座といった空間の差別をも生んだ。それゆえ、私は君主が死んだ後も、「主君に使え、服従し、あなたの傍であなたをお守りし、必要があればすぐに駆け付けます。」という無言の言葉を感じ、統制のとれた主従関係が機能していたと感じた。

ウ:表情・しぐさ(動作)

表情は極めて真面目であり、喜怒哀楽の感情表現はない。現代にも通じる、日本独自の正座文化では、心を無にすることで、相手への畏敬の念を表現している。私はこの埴輪から感じた役割とは逆に、生前に生まれた絶対的な上下関係は、死後の世界でも継承され、それが覆ることのない無力感と脱力感が、この埴輪の表情から伝わった。主君へ服従しながら、内心ではそれに納得できず、どう

しようもできない自分に苦悩する表情を、この埴輪から強く感じた。

②椅子に座る埴輪 参考:「椅子に座り坏を捧げる巫女」(国指定重要文化財)

ア:特徴

椅子に腰掛け、足を下して座った様子が伺える。椅子は身分の高い人しか座れず、服飾品からも、儀礼的な場面が想像できる。特に女性の巫女が座している埴輪は、巫女の身分が高かったことに加え、使用された呪具を観察できる。
⇒観察した「椅子に座り坏(ツキ)を捧げる巫女の埴輪」においては、驚くことに女性の埴輪であった。私は、当時の身分の高い人間は全て男性だと考えていた。そのため、巫女という職業が女性に割り当てられ、それなりの職位(地位)が与えられていたことに驚いた。古墳時代から一定の職には女性を登用し、神事の下では、それを取り仕切る権限を与えていたのではないかと感じた。

イ:役割

死後の世界においても、祭事や神事は神聖なものとして取り扱われたはずである。この時代は病気や天候も、全て神に祈りを捧げることで、希望が叶うものだと考えられていた(シャーマニズム)。何もこうした考えは、日本独自のものではなく、世界共通の部分がある。エジプトにおいては、ピラミッドから王(ファラオ)の周りには神官が仕え、政治まで取り仕切っていたことが壁画や埋葬品から証明されている。私は、椅子という道具を側面的に利用することで、神職という称賛の対象物を「神々しく見せる役割」を果たしていたのではないかと考えた。高い目線を保ち、下から見上げられる対象物、神の代理人として崇拝される対象物としての偉大さを演出するツールとして、椅子は重要な役割を果たしていたと考えた。「座る人間」と「座れない人間」。単純なことだが、社会秩序を保ち、権力構造を維持するためにも、格差は必要だったのかもしれない。

ウ:表情・しぐさ(動作)

顔には派手な化粧が見受けられる。鏡を腰に付け、魔よけの紋章の入った襷もかけている。ネックレスや足元の靴(ブーツ)も女性的である。耳飾りや帽子からも、身分の高い巫女であることが分かる。その表情は自信に満ちている。厳粛な雰囲気の中で、神事を取り仕切っていた様子が伺える。邪馬台国の卑弥呼がそうであったように、私は、世界共通のシャーマニズムの時代において、神からのお告げにより政治が支配され、物事の優劣が決まり、人々の行動も管理されていたことに少し恐怖を覚えた。本当に神のお告げがあったかどうか分からないが、特定の人物に権力が集中し、誤りが正せない・指摘できない状況は不幸であるとさえ感じた。

写真3 正座(跪座)の男子と椅子に座る主人



前傾姿勢を保ち、足のかかとをあげている。つま先立ちに近い状態で、次の動作への移行がスムーズに行える準備をしている。

写真4 椅子に座り坏を捧げる巫女



顔の化粧やネックレスは圧倒的な存在感を醸し出している。神事から政治を仕切る存在として、権力は絶大である。

3: 調査結果と今後の課題

3-1. 結果

- (1) 群馬県には優れた埴輪を製作する職人が多数居住していた。「Made In GUNMA」と埴輪に記入されていないが、実際の埴輪の出土場所や形状などから、ここ群馬県で多くの埴輪が製作されたことが分かっている。他県と違い、装飾豊かな埴輪が多数発見され、文化や芸術への高い関心が伺える。「埴輪と言えば群馬県」とまで言われたはずの世界最高水準の技術力である。
- (2) 群馬県という名称だけあって、そこには多くの馬が飼育・放牧されていた。大規模な飼育技術は、先進国である朝鮮半島からもたらされた。もしかしたら、群馬県には朝鮮人が多数渡来し、馬の技術と同時に埴輪の技術も伝えたのかもしれない。中でも驚くべきは、職員たちが馬への畏敬の念と共に、それらを忠実に再現した埴輪を製作したことである。財産や権力の象徴としての馬を形どるだけでなく、人が馬に乗った埴輪や馬具が装着された埴輪など様々なパターンを製作した。当時の最先端な移動手段であった馬は、今でいえば電気自動車のような存在なのかもしれない。おそらく、権力者たちは様々な馬具を装着させ、馬をカスタマイズし、他の馬との差別化を図ったに違いない。いつの時代も、「人よりも優れた資産を保有

したいという人間の果てしないエゴ(自尊心)は変わらない。」と痛感した。

- (3) 人物埴輪は、その姿やしぐさ、表情から様々な思いを感じ取ることができる。宗教、戦闘、合奏などの様々な日常シーンが再現されている埴輪が多く、死後も生前の日常と変わらない「平凡な日常」を送って欲しいとの思いがあったのかもしれない。平凡こそ最高の幸せであり、平和そのものなのかもしれない。しかしながら、私は「正座(跪座)の男子と椅子に座る主人」の埴輪からは、主君に対する単純な謝罪や報告といった役割とは裏腹に、その表情から少し寂しさと絶望を感じた。厳格な身分制度の中で社会秩序が維持され、死後もその関係から解放されない呪縛に、一定の憐れみさえ感じた。後世に「下剋上」が生じたように、このどうしようもない感情は、綿々と我々日本人のDNAに刻まれていったのかもしれない。
- (4) シャーマニズムに基づく巫女は、当時の有力な権力者である。神と交信できる巫女は、政治も自分の思うように操り、良いことも悪いことも全て神の責任とした。果たして、現代社会でも似たような現象はないだろうか。一定の人物に権力が集中し、支配されていないだろうか。決して、過去の話ではない。この埴輪から私は、権力が集中することの恐ろしさと、「対話」することの重要性を感じた。ロシアによるウクライナへの侵略戦争や中国による台湾情勢の緊迫化など、もっと対話することで、事態の打開策を平和的に探して行くべきではないかとも思った。

3-2. 今後の課題

- (1) 現物の調査対象が群馬県の埴輪に限定されており、他県の埴輪はインターネットでしか観察できなかった。コロナが終息した後は、関西方面の埴輪を実際に観察し、現物に触れることでその違いや役割などを検証したい。
- (2) 埴輪にスポットライトを当てて検証してきたが、今後は群馬県の古墳の特徴も、詳細に調べて行きたい。古墳の特徴に埴輪の特徴を加えることで、より群馬県の古墳時代の特徴が浮き彫りになると考えた。
- (3) 調査対象の埴輪を限定したため、まだまだ知らない埴輪が数多くある。埴輪の概念を学ぶことは当然必要であるが、一つ一つの埴輪を深掘りすることで、埴輪が現代に生きる私たちに何を語っているのか考えてみたい。
- (4) 群馬県には、様々な埴輪に関するイベントや展示会、グッズ販売などがある。特にマンホールの絵柄は、高崎市のみ見かけたことがあるが、他の市町村にも同様なものがあるかどうか含めて検証したい。また、以前、父が「HANI バウム」を買ってきたことがある。埴輪のことを全然知らずに、「変わった形のバームクーヘンだな」程度の感想で食べていた。思いかえすと円筒埴輪を忠実に再現している。日本一の埴輪県である群馬県の県民として、もっと埴輪の魅力を伝えるためにも、できるだけ多くの埴輪関連グッズを集め、体験し、周囲の友人たちに伝えて行きたい。

写真5 HANI バウム



写真6 HANI 珈琲



写真7 HANI サンゴライト



4:今後の古代文化の普及のために

群馬県は行政と民間が幅広く連携し、広く埴輪や古墳の PR 活動を展開している。しかしながら、私は群馬県民であるにも関わらず、あまり埴輪や古墳を知らなかった。なんとなく小学校時代に勉強したが、それほど深く考えなかった。

従って、今回の埴輪の研究を通じて、県民のみならず全国に埴輪や古墳の大きさを知ってもらうために、以下のことを提案したい。

(1) HANI アプリの外部連携と発展

このアプリはとても面白い。埴輪の育成ゲームであるが、実際の古墳や埴輪を忠実に表現している。随時、アプリもバージョンアップされ、参加者が飽きない工夫が随所に見受けられる。今後は、**全国レベルで「HANI-1 グランプリ」との連携や実在する古墳や埴輪にQRコードを付け、それを読み取ることで、埴輪や古墳が強化され、レアな埴輪の入手等ができるなどの機能が追加されれば面白いのではないかと感じた。**また、群馬県に多くの埴輪職人が居住したことになぞらえ、埴輪職人として、一つの村からスタートし、最終的に群馬県だけでなく日本一の埴輪職人を目指す育成型ゲームもこれまでと視点が違って面白いのではないかと思った。

(2) 古代人(埴輪職人)としての体験型テーマパーク(HANIパーク)の設立

古墳時代の不便さを体験し、自分自身が古代人(埴輪職人)になりきる。埴輪を製作する工程を経験することで、埴輪の役割などを学ぶ。単純に博物館などの展示を見学するのではなく、実体験を行うことで、その知識は全然違ってくる。私のように漠然と見学するのではなく、目的を明確にし、**大人から子供まで、広く体験学習できるテーマパークが役に立つ**と思う。また、そこでの食事や衣装なども工夫し、古代米を使用した料理やスタッフがその当時の衣類を着用するなど、**五感を駆使したテーマパークは、広告宣伝効果も大きい**のではないかと感じた。更には、テーマパークにふさわしい**「HANIソング」**もあると知名度向上へ寄与すると思われる。

(3) マンホールカードを参考にした「HANIカード」の有料販売

マンホールカードは、コレクターを中心にとでも人気がある。マンホールに古墳や埴輪がプリントされ、それがカードになったものもある。しかし、マンホールに記載された埴輪や古墳しかカードになれないのであれば、それは非常に勿体ない。

日本には数多くの珍しい埴輪や古墳が存在する。そのため、マンホールカードのように、日本全国共通のプラットフォームを作成し、まだ日の目を見ない古代文化を日本国内に周知し、最終的に海外展開も出来たら面白いのではないかと考える。海外展開用には、英語バージョンを作成し、日本の古代ロマンを紹介できれば、より日本の魅力を感じ取ってもらえるのではないかと考えた。

写真8 藤岡市

写真9 埼玉県吉見町

写真10 埼玉県本庄市



補足:マンホールカードとは、下水道広報プラットフォーム(GKP)が発行するカードで、配布場所に行くとも無料でもらえる。発行をするか決めるのは各自治体で、各自治体に実際にあるマンホールの写真をカードにしたもの。

参考文献

- ・群馬県『東国文化副読本』令和2年
- ・群馬県公式はにわガイドブック『HANI-本』第二版
- ・群馬県立歴史博物館『すばらしき群馬のはにわ』令和2年
- ・群馬県立歴史博物館ホームページ
- ・群馬県ホームページ
- ・埼玉県本庄市ホームページ
- ・埼玉県吉見町ホームページ
- ・文化庁ホームページ
- ・群馬県『HANI アプリ』
- ・かみつけの里博物館 常設展示